

昭和文学全集



24

辻邦生

小川国夫

加賀乙彦

高橋和巳

倉橋由美子

田久保英夫

黒井千次

昭和学生文学全集



24

辻邦生

小川国夫

加賀乙彦

高橋和巳

倉橋由美子

田久保英夫

黒井千次

昭和文学全集
第24巻

昭和六三年八月一日 初版第一刷発行

著者 辻邦生 小川国夫 加賀乙彦 高橋和巳

倉橋由美子 田久保英夫 黒井千次

発行者 相賀徹夫

発行所 小学館

一〇二一〇一 東京都千代田区一ツ橋二丁目二番一號

振替 東京八二二〇〇番

電話 編集・〇三二二九二四二五

業務・〇三二二五三三三

販売・〇三二二五七三九

印刷 凸版印刷株式会社

製本 凸版印刷株式会社

若林製本工場

用紙 三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568024-5
© T.TSUJI K.OGAWA O.KAGA T.TAKAHASHI
Y.KURAHASHI H.TAKUBO S.KUROI 1988

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりがえいたします。 *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

辻邦生

5

7 旅の終り

13 ある告別

25 安土往還記

115 ランデルスにて

122 風越峠にて

138 霧の聖マリ

146 夏の海の色

159 プッペン・クリニツク

170 燕の飛び立つ日

小川国夫

181

183 海からの光

260 試みの岸

313 心臓

320 甘い砂

338 塵に

加賀乙彦 345

347 異郷

372 くさびら譚

395 風と死者

416 夢見草

4 2 5 最後の旅

4 5 0 雨の庭

4 6 0 イリエの園にて

4 7 4 ドストエフスキイ博物館

4 8 3 ヤスナヤ・ポリャーナの秋

4 9 3 新富岳百景

高橋和巳 5 0 5

5 0 7 墮落

5 7 2 悲の器 第一章～第十一章

倉橋由美子 6 6 1

6 6 3 夢の浮橋

7 6 9 パルタイ

7 8 0 ヴァージニア

田久保英夫 8 1 3

8 1 5 深い河

8 4 6 髪の環

8 5 6 月かげ

8 6 7 蜜の味

8 7 5 夢の谷

8 8 6 河明り

894 朝の通り

902 夏野

910 羽搏き

920 雫

928 蕾

935 海図

945 辻火

黒井千次 957

959 時間

988 隠れ鬼

997 石の話

1008 春の道標

1105 作家アルバム

解説

1113 辻邦生……菅野昭正

1118 小川国夫……大橋健三郎

1123 加賀乙彦……金子昌夫

1127 高橋和巳……川西政明

1131 倉橋由美子……富岡幸一郎

1135 田久保英夫……桶谷秀昭

1139 黒井千次……川村湊

年譜

1143 辻邦生……井上明久

1147 小川国夫……山本恵一郎

1151 加賀乙彦……金子昌夫

1 1 5 5 高橋和巳……川西政明

1 1 5 9 倉橋由美子……保昌正夫

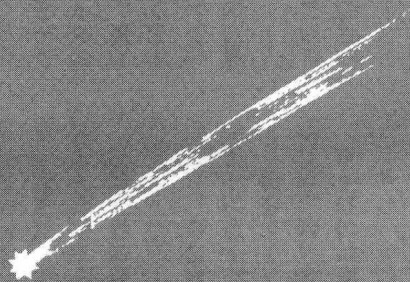
1 1 6 3 田久保英夫……田久保英夫

1 1 6 7 黒井千次……黒井千次

1 1 7 2 底本について

1 1 7 4 用字用語について

辻邦生



旅の終り

旅の終りに予定していたその町についたのは、もう夏もほとんど過ぎさうとしているころだった。

私は、観光客や避暑客でにぎわう町の広場を、並木のおとす濃いかげのなかに立って、ながめていた。日ざしは強く、町は白くまぶしかったが、地面におちるかげは濃く、風はさわやかに吹きすぎていた。それが海からの風であることは、誰にも容易に知ることができた。

私がそこに立っているあいだにも、何台かの馬車が近よってきて、浅黒く日焼けした御者たちが、「旦那」と声をかけていった。なかには、ながい鞭で地面を強く叩いて、私の注意をひこうとする御者もいた。そんなとき、鞭は、鋭い、乾いた、きびしい音で鳴った。

木かげには何人かの男たちが休み、新聞売場では、若い女が通りがかりの男たちの冗談に、肩をすくめたり、笑ったりしていた。町は正午に近く、暑かったが、まだ朝の気分がのこり、町全体に休暇の気分がただよっていた。

新聞売場の前に、バスの乗り場があり、広場をまわって入ってくる大型バスが、圧搾空気の音をたててドアをしめると、またそこから出ていった。

バスからおりてくる乗客のなかに、妻を見つけたのは、発着するバスの数を、いい加減かぞえあきたときだった。

「ごめんなさい。おそくなっちゃって。」妻は汗ばんで、いくらか興奮していた。

「でも写真がとれたのよ。まさかと思っていたんだけど、思いきって交渉してみたの。」

やっぱりお金がほしかったのね。五百リラ出したら、手のひら、かえすみたい。なんだか、悲しくなっちゃった。」

「いいじゃないか。こっちは写真さえとりさえすればいいんだから。で、石棺は、うまくとれた？」

「明るい部屋だから、たぶん大丈夫だと思うわ。前からも、斜めからも、沢山とってやった。」

「やけにならなくてもいいさ。」

「やけじゃないのよ。こんなに、とってみても、あの石棺の美しさなんて、とてもとりきれものじゃなくてよ。それに、誰にも、わかってもらえそうもないし……。」

「ぼくだって、よくわかりそうにない。」

「でも、それはいいもののなの。あんないいものには、めったに、ぶつかれるものではないのよ……。で、あなたの方は？」

「ジュゼッペの細君はいなかったよ。」

「それじゃ、子供たちだけだったの？ 大へんだったでしょう。」

私は、妻が美術館で石棺や彫刻の破片のあいだで、メモをとり、図写しているあいだ、ジュゼッペの家にいったみたのだった。ジュゼッペは仕事に出、細君は朝の買物に出かけていて、十二歳のマリアが、小さな三人の弟妹を遊んでやっていた。路地の奥の家の二階

で、天井は高く、小ぎつぱりしていたが、家具は古く、飾りらしいものといつては、壁にかけた聖母像ぐらいのものであった。マリヤは眼のふちに蒼味を帯びた、無口でやさしい娘だった。私は片言のイタリア語で「お父さんは？」「お母さんは？」「何をしてあそぶ？」などといつてみた。一番下のアダルドは栗色の捲毛の可愛い子だったが、どうしても椅子のかげにかくれて、出てこなかった。マリヤが私に挨拶せようとすると、こんどはマリヤの背なかにかじりつき、顔をかくして、手だけ私のほうにのびし、ちらりと私を見、手をにぎると、また椅子のうしろに逃げていつてしまった。上の二人は、それを心よげに笑って、口々に、アダルドは何とかと叫んだ。

それでも私たちはすぐ友だちになってしまった。私は折り紙をおり、かぶとをつくって四人の子どもたちにかぶせ、最後に、狼ごっこをはじめた。私が狼で、森のなかからあらわれる。マリヤが、弟妹たちに、物語でも話すような調子で、情景を描写する。と、子供たちは、真剣な顔をして、テーブルや椅子のかげにかくれ、最後に、悲鳴をあげて、マリヤの身体にしがみつくのだった。

騒ぎがひどかったために、下から、門番の細君が、何か大声でどなった。マリヤは階段

のうえから「スクーゾ。スクーゾ。」といった。私は、自分がすこし度をこしているのに気づいて、マリヤに、同じように「スクーゾ。」といつてやった。マリヤは笑って「いいのよ。」という風に首をふつてみせた。

私たちがジュゼッペと知りあったのは、妙な偶然からだった。この町にくる前に、私たちは一晚だけC**の町にとまって、その古代の遺跡をみることにしていた。ところがC**はちょうど宗教会議で、町じゅうが照明され、教会は豆電球で飾られ、どの通りも雑踏し、行列がうねり、ホテルはどこも満員だった。私たちはほとんど夜になってからC**についたので、急に予定を変えることもできなかった。私は、夜のあいだ、祭りを見物し、翌朝の一番列車でS**にゆくことを提案した。C**からS**までは二時間たらずだし、一番でたてば、七時には、うまいコーヒーと白いシャツにありつけるといわけだった。しかし祭りが終わったあと、夜明けまで、駅の待合室で過ぎなければならなかった。私たちは、そこで知りあった男から、S**にある格安のパンシオンを紹介してもらった。しかしその場所はS**の町の郊外で、ようやくそこまで辿りついてみると、すでに何年か前から休業しているというのだった。

疲労のうえ、朝になると、急に気温がのぼり、私たちは目くらみそうだった。とりあえず、郊外の小さなカフェに入ったのだが、そこにたまたま来ていた衛生監督官が、ジュゼッペだったのだ。

彼は私たちにジュースをおごってくれ、町のホテルを教えてくれた。ホテルの名は「グラン・ブルタニア・ホテル」だった。妻は私の耳もとで「上等なホテルじゃない？ 大丈夫？」といった。

「今ならコンティネンタル・ホテルだってとまる気になるよ。」私はいった。

私はジュゼッペのために似顔絵をかいてやった。勤務時間のあいだ、見知らぬ外国人の前で、にこりともせず、ポーズをとっている男が、衛生監督官だと思うと、なぜか笑いがこみあげてきてならなかった。

しかしとも角、グラン・ブルタニア・ホテルは町の中心地近かったが、雑貨屋の二階にある五間ほどのパンシオン風のホテルにすぎなかった。ただ部屋が大きく、家具が古めいていて、昼間でも鎧戸をおろした室内は、涼しく、清潔で、奥の方から風がよく吹きぬけていた。

ジュゼッペは勤務がおわると、私たちをギリシアの遺跡に案内するといつてきかなかった。実直な男で、暗い、皺の深い眼の、浅黒

い禁欲的な顔をしていた。

妻はよく「こんなにしてもらって悪いわ。」といった。

「好意だよ。受けとくべきき。それに、似顔だっにかいたんだ。」

「あなたの似顔絵なんかじゃ、悪いわ。」

「あれだっけ好意だぜ。」私はいった。

私はイタリア語はまるでわからなかった。妻がジュゼッペの言葉を私につたえてくれた。

「シニョーレはまるでわかりませんかね。」ジュゼッペが残念そうにいった。

「ええ。《今日は、お嬢さん》^{ボニョリーナ}ぐらいですの。」妻がいった。ジュゼッペは笑った。

「私の妻は映画館で働いているんですよ。切符を売っているんです。夜、私たちは割引でみられますよ。今夜あたり、どうですか？」

「夜は、休まないと、翌日働けませんもの。」妻がいった。

「私の妻に会って下さると、大喜びするんですが。そりゃいい女です。善良で、四人の子持ちで、私を愛しています。」

「ぜひ会いにゆきます。アダルドにもね。」

「アダルドも他のマリアをしたっていますし、マリアは母親を愛しているんです。でも、夜は、どうしても駄目ですかね。」

「ありがたいけれど、休まなければならぬ」

んです。ながいこと旅行しているものですかから。」

「じゃまた見にいつてやって下さいよ。あれはいい女なんです。自分の知りあいの日本人がきたなんて、そりゃ誇りに思いますよ。」

私は、そんなことで、妻が美術館にいつているあいだ、ジュゼッペの家によってみたのだった……。

夕方、私たちがホテルで休んでいると、ジュゼッペがアダルドを肩車にしてやってきた。小さなアダルドは父親のあたまの後に顔をかくして、身体をよじり、なかなか顔を見せようとしなかった。

「これから映画にいつてきます。」

「マリアたちは……？」

「他のは今夜は留守番です。これは母親のそばにおいておきます。」

「マリアによろしくいつて下さい。」

「じゃ、さよなら。」^{ボナ・セーラ}

「さよなら。」

私は階段の上でアダルドに「Ciao!」^{チャオ}といった。アダルドはすばやく顔をあげ、笑顔をみせると、また父親のうしろにかくれた。私たちは父子が細い階段の下に消えるまで、そこに立っていた。

夜になって、風がとまり、妙にむし暑かつ

た。

となりのベッドで妻が寝がえりをうった。

「眠れない？」私は声をかけた。

「あついわね。」妻がいった。

「映画にいつたほうがよかったね。」

「私たち、明日があるんですもの、休まなくちゃ……。」

「でも眠れないくらいなら……。」

「横になるだけでも休めるわ。」

私は黙って天井をみていた。天井は暗く、高かった。しかしむし暑く、風はまったくなかった。私はベッドをおり鎧戸をあけた。通りには人影はなかったが、広場のほうはまだにぎわっているらしかった。

「散歩してみないか。」私は妻のほうを見た。妻のベッドは暗いかげになっていて、その姿は見えなかった。

「そうね、一まわりすれば、眠れるかも知れないわね。」暗闇のなかで妻がいった。

戸外はそれでも夜気がいくらか冷えはじめていた。そんな夜のせいか、広場のアーケードの下に光が輝き、キャフェのテラスもにぎわっていた。

しかし広場をはなれると、急に、町に、人の気配がなくなつた。暗い、かげを刻んで、うねっている古い町並は、白い夏の日ざしの下でみた乾いた町とは、同じ町に思えなかつ

た。

「ギリシアの僭主^{ゼノク}ディオニュシオスが……。」「不意に私の口がそんな言葉をつぶやいた。」

「え？ なに？」妻がききとれずにいった。

「僭主^{ゼノク}ディオニュシオスき。」

「ディオニュシオスがどうかしたの？」

「いや、それだけき。ディオニュシオスのことを思いだしたけど、それだけき。」

私たちは黙りこくって、幾つもの暗い通りを歩いた。足音が私たちのあとからゆっくりついてきた。町は深夜のようにひっそりしていた。

私たちは、さらに幾つかの通りをこえてから、道にあかりを投じている小さな店に入った。戸口にのれんのような細いビニールの仕切りが垂れていた。私はビールを飲み、ガラス窓にVINOと書いてある字を、後から、逆に見ていた。店のなかで労働者風の男が二人でカードをたたかわしていた。カウンターの後から店の主人夫婦が、ときどき口を挟みながら、それを見ていた。

「こんな静かな町で、誰にも知られないで、野心もなく、ひっそり暮すのもわるくないわね。」妻がそういった。

私は仕合わせなジュゼッペの一家のことを考えていた。眼のすみに蒼味を帯びたやさしいマリアや、はずかしがりのアダルドのこと

を……。しかしもちろん私はこんな町へとはまれないことを知っていた。おそらくそこに住んだとしても、絶えず周囲から距離を持たざるをえないだろうし、美術館をゆっくりたのしむ気持にもなれないだろう。

「シラクサの僭主^{ゼノク}ディオニュシオスは……。」「私は思わず無意味にそうつぶやいた。妻は私を見、黙って、眼をそむけた。私はビールの酔いを感じはじめていた。

幾日か、私たちはこの町で暮した。妻は、午前ちゅう、美術館にかよって、石棺のほか、ローマ時代の彫刻破片の調査に時間をとられていた。私はギリシアの植民市だった町の遺跡を一通り見たあと、町を歩いて時間をつぶしていた。

そんな一日、ジュゼッペ一家と私は朝から海へいった。白い、まぶしい砂浜に、青い海が輝いていた。私は彼らと不思議に気持がよく通じた。ジュゼッペ夫妻とさえ、私は片言で十分に気持が通じるのだった。午後になって妻が加わり、泳いだり、砂の城をつくったりした。マリアは十二歳の少女らしく、抜き手で泳ぐジュゼッペとならんで、沖まで軽々と泳いでいった。

ジュゼッペの細君は夕方早くかえっていった。夜の自分の仕事を彼女は神聖なものに感

じているらしかった。

「シニョーラの勉強はまだ終わりませんか。」砂浜でジュゼッペがいった。

「もうすぐよ。もうほとんど終りですわ。」妻がいった。

「パリジの大学で博士になるんですかね。」

「なるかもしれないし、ならないかもしれないのよ。」

「早く博士になって、バンビーノをつくりなさい。大切なのは生活^{ヴィータ}ですよ。男にとつて大切なのは妻と子供ですよ。それに太陽だ。」

ジュゼッペは空をきした。マリアが小さい弟妹たちと砂浜をかけあがってきた。

「私の子供たち。」ジュゼッペは一人一人を両腕で抱き、頬に、音をたてて、接吻した。

私は青い海をながめた。海は夕づいて、紫色を帯びていた。「シラクサの僭主^{ゼノク}ディオニュシオスは……。」「私はふとそうつぶやいた。

私たちがかえる日を決めなければならなかったとき、おそらく誰より悲しんだのはジュゼッペにちがいがなかった。暗い、皺の深い眼で、私たちを交互に見、来年もこの町にくるか、といった。私は、来年は来られないが、ローマまでくるだろう、といった。彼は、ぜひローマまで出てゆく、といった。彼は、

「家内も休ませて、みんなでゆきますよ、き

っとゆきますよ。」彼は私の手をつかんでそういった。

その夜、私たちは、ジュゼッペの細君が窓口で切符を売っている映画館にいった。

彼女は、肥りはじめた、胸の豊かな、善良な女だった。私たちは映画館じゅうの人たちに紹介されそうな勢いだった。

「半分割引になっています。家族なみなんです。」細君は興奮して、声をひそめ、私の妻にそういった。

しかし映画のすじは、私には、よくわからなかった。私は、子供のとき、やたらに大きな顔が出たり、暗い町角が出たりして、意味のさっぱりわからなかった映画館での奇妙な気分を、思いだした。

映画からのかえり、私たちは義務を果たしたような気持で、町をたつ日を決めた。夏はもうほとんど終りかけていた。その証拠には、翌日は朝から雨だった。私はベッドのうえで地図をひろげたり、手紙をかいたりした。それに疲れると、広場まで出かけて、アーケードの下のカフェに入り、一日おくれのパリの新聞を読み、人気のない広場に降る雨をながめた。妻は、雨のなかを、最後に、美術館の石棺を見に出かけていた。

私が夕方おそくホテルにかえると間もなく、何か鋭い女の絶叫のような声をきいた。

それは異様な調子の叫びで、一度きいたら忘れることのできないような声だった。

窓から首をだしたとき、すでに何人かの男が、雨のなかを、向いの家につけこむのが見えた。間もなく、ゴムの外套がいろを着た巡査が二人かけつけた。雨がひどくなっても、人垣は、いっこうに崩れなかった。

妻がその雨のなかをかえってきた。

「誰かが死んだんですって。」妻がいった。

「女の声をきいたよ。」

「殺された……？」

「凄いい叫びだった。」

「まさか、そんな声を……。おそろしい。」

「それは、ちょうど……。」

「もういいの。いわなくてもいいわ。いったいどうしてそんなことに……。」

「ホテルのおばさんにきいてみるよ。」

「こわいわ。とても、こわい。」

私たちは雨の音をきいていた。ドアを叩く音がした。妻は蒼い顔をしていた。

ジュゼッペだった。「騒ぎを知っていますか。」彼はいった。

妻が、私が悲鳴をきいたことを話した。

「それは管理人の声だったのですよ。」彼はいった。「死んだのは若い男女で、何か毒薬で自殺したんです。」妻が日本語で彼の言葉をくりかえした。

私はジュゼッペの顔をみた。「イタリアで……？」私は思わずいった。彼は敏感にさとして肩をすくめた。

「愛してたんでしょうが……よくあることです。」

私たちはその夜、一晩じゅう雨の音をきいていたように思う。妻は蒼い顔をし、どうしても一人で寝られないといった。しかし妻が私のベッドに寝息をたててからも、私は眠ることができなかった。

どのくらいたった頃だろうか、私はそっと起きて、窓をあけ、外を見た。雨はまだ降りしきり、街灯の光のなかで、雨脚がしぶきをたてていた。雨につつまれた町は死にたえたように静まりかえり、事件のあった家も闇のなかでひっそりしていた。さっきの騒ぎはうそのようだった。しかしかえって、この雨にうたれた空虚な闇が、私に、最後にここまできた若い男女のことを考えさせた。なぜかこの二人が死んだことが、私には、安らかな、ある悲劇の終末のような気がした。そこに空虚と沈黙と同時に、果しない休息もあるような気がした。「こんな静かな町で、誰にも知られず、野心もなく、暮らしてみてもいいわね。」妻がそういったときの気持が、私のなかに、雨のしずくのように、流れこんでくるようだった。その妻は蒼ざめて、いまは静か

にねむっている。おそらくあんな事件を眠りのなかまでは持ちこむまい。私は、妻のほうを見たが、暗い部屋のなかで、そのかげを見かけることもできなかった。

果してここに止まることは、安らかさのなかへの休息なのであろうか。歴史もなく、歴史に鞭うたれることもなく……。ジュゼッペ一家のように？

私は暗い人氣ない通りに雨の降りしきるのを見つめながら考えつづけた。おそらく私たちは明日午後の列車で町をたつだろう、何一つ未練なく……。そして五年後には、ジュゼッペのことも忘れるだろう。おそらくこの小さな事件のことも……。にもかかわらず私はこの町にとどまりたい激しい衝動を感じた。これは一瞬触れあい、また永遠に離れていってしまう何かである気がした。「シラクサの僧主^{ぜんしゅ}ディオニュシオスは……。」私は思わずそうつぶやき、街灯の光のなかにしづく雨脚を、ながいこと見つめていた。

ある告別

ギリシアの船の出るプリンディジ港での奇妙な半日の経験は、南イタリアの燃えるような真夏の太陽のせいではなかった。それはおそらくパリからずっと一緒だったあの男と出会った最初の瞬間から、すでに予感していた衰弱のせいにはいなかったのだ。

プリンディジは貨物船のとまるだけの、かげの少い、貧しい港町だった。その港についた朝、私は列車からおりるや否や、なにか大きな拳でなぐられでもしたかのように、とつぜん、激しい目まいにおそわれて、その場へたへたと倒れてしまったのだった。私は町を歩くこともならず、駅からじかに港に続いている倉庫のかげで、棄て犬かなにかのように、十二時間ものあいだ、海からの風に吹かれたまま、ねむり続けなければならなかった。そんな経験は生れてはじめてのことだった。

私はなんだかそのあいだにも人声で眼をさました。そしてはっきり見わけける力もなく、労働者たちがトラックから船へ荷をつみあげるのを見、それがいつのまにか夢のように消えてしまっていて、自分が夢でトラックを見ていたのか、それとも、いまのうつろな港が夢なのか、自分でもはっきり決めることができないのだった。

その眠りのあいだに私はあの男がどこかその辺を、灰色のよごれた洋服を着て、首を肩のあいだにすばめながら、急いで歩くのを、なんだか見たような気がした。しかしそれがはたして本当の彼だったのか、あるいは私の夢の一部だったのか、はっきり決めることはできなかった。

その男に会ったのはパリのリオン停車場の出発間際の混雑のなかでだった。彼は旅立ち

に似合わぬおそろしく貧しい身なりをしていた。眼ぶかにかぶった黒い、ベレーのしたから、光った、残忍な、小さな眼が、たえずあたりをうかがっていた。色は浅黒く、ねこぜで、歩くときは、大またで早足に歩いた。私がはじめて彼をみたとき、狭い列車の通路に立ちぶさがって、こんな風に喋りまくっているところだった。

「本当のところ、私はギリシアにゆくんだか、エーゲ海を見にゆくんだか、わからないですよ。私はロードス島までゆくんです。これはたしかです。しかし皆さんのようにアテネなんかにはぶらぶらしませんよ。ギリシアは海にしかないんだから。せめてギリシアがあったとしての話ですがね。」

彼は残忍な小さな眼をまばたいて相手をみた。その調子は独断的で、相手がかりに反対でもしようものなら、その言葉を嘲けるような調子で一撃のもとに片づけてしまいそうな気配に見えた。彼はロードス島をはじめ実に多くの島々の知識を詳細に集めていた。それはほとんど該博といってもいい位だった。しかしそれにしても、もしこの男があんなことを言わなかったとしたら、おそらく彼の印象はもう少し違ったものになっていたにちがいない。私は、席について間もなく、この男が通路でこんな風に叫んでいるのを耳にしたの

である。

「たとえあなたがギリシアにいったって、いいですか、これだけは忘れてはいけませんよ、あそこには、文明はない。古代ギリシアにはもう文明なんてなかったのです。ギリシア人は狡猾な人種にすぎなかった。彼らは東方古代の残滓をかき集め、焼きなおしたんです。いいですか。文明は、三千年来、人間を見ずてしまっているんです。もっとはっきり言えば文明はエジプトが滅んだときに終わっているんです。ぼくはエジプト人です。だから確信をもってそう申しあげるんです。」

私のとなりには若い男はそれをきいて肩をすくめ「ばかめ」とつぶやき、ねむりこんでしまった。

エジプト人は私と同じ車室に席がとってあり、列車が発し、話相手がなくなると、席まで戻ってきて、なにか独りごとをいったり、小声で歌をうたったりしたが、もう誰も彼に関心を払う様子はなかった。そればかりではなく、人々はこの男には断りもなく早目にあかりを消してしまつたのだつた。

室内にはうす暗い終夜灯がついているだけだつた。人々が寝しずまると、野にこだまする列車の響きが妙に孤独にきこえた。

それからどの位の時間がたったのか、定かではなかったが、何度目かの浅いねむりから

浮びあがった私は、ふと、そのとき、エジプト人がまだおきていて、しかも窓のカーテンに顔を埋めて肩をふるわせているのを見たのである。私が彼のほうをうかがっていると、彼は間もなく顔をカーテンから引きはなした。それはちょうど、かくれんぼのとき子供がする様子に似ていた。そしてその顔は笑いに歪み、その笑いは発作のように彼を襲ってくるらしく、それをこらえようとして、またカーテンに顔をかくす。と肩が笑いにゆれはじめるのだつた。彼はそうやって、かなりの間、無言で笑い続けた。そしてひとしきり笑つた揚句に、こんどは妙なことをはじめた。彼はある種の自己満足の表情をうかべながら、右手で右の耳たぶをつまむ。やがてそれをおろすと、左手で左の耳たぶをつまむ。左手をおろすと、こんどは、両手を耳にもってゆく。そんなことを繰り返人形のように繰り返しては、また身をよじって無言で笑い続けるのだつた。

「この男はいったい何者なのだろう。エジプト人にはちがいないとしても、この傲慢、無作法、奇怪さは、はたして私たちの社会に通用するものなのだろうか。いやこの男は、ひょっとすると、ギリシアを否定するために、わざわざこの世にやってきた《東方》の象徴なのかもしれない。あの乾いた陸地の国、あ

の神秘で禁欲的な東方の専制政体の申し子であるかもしれない。」

こんな考えはばかっていたが、それでも一種の恐怖とともに、私の眼のまを様式化された褐色の人間たちが、謎のようなエジプト文字のなかを、行列をつくって歩いてゆくのが見えた。すべてを《死の国》のために捧げ、この世をただその《死》への準備とみなしたこの行列は、それぞれに蓮をもち、珍獣を担ぎ、大きな眼を動かさずに通過していった。最後には行列が薄れて、この眼だけが幾つも幾つも、ちょうど眼だけを出したモロッコ女のそのように鋭く光り、不動のままに、通過していった。

私は声をあげそうになり、はっとして自分が夢をみていたのに気がついた。エジプト人は例の残忍な眼で私のほうをうかがっていた。

私はなぜかその眼の行列を死の映像のように感じた。私はひどく疲れていたが、この眼の行列がひきおこす恐怖に打ちかとうと努力すればするほど、かえって疲れが重い液体のようにまつわりついてくるのを、どうすることもできなかった。この疲労はただごとじゃないぞ、私はそうつぶやきながら、また不安な苦しいねむりのなかに沈んでいった……。

そうだった、私は、こうした揚句に、ブリ